私たちが国東を元気にします 国東の原動力 Vol.23

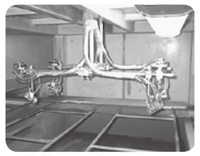
企業編

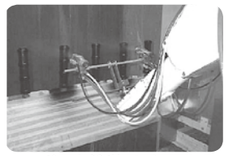
大分パーカライジング株式会社

安岐町西本696番地1
開設▶平成10年3月
従業員▶67名

金属等を防錆するためにリン酸塩皮膜処理するパーカライジング法を日本で独占使用する会社として、大正4年に日本パーカライジング株式会社が東京都に設立されました。その後、防錆処理する薬品の製造から、製造した薬品で加工処理するグループ会社など事業を拡大していきました。創業者の故 里見雄二さんが、竹田市出身で、大分県の地域振興に貢献したいと常々願っていたので、その願いを叶えるために息子の豊さんが県内に企業進出することを決めました。そして、大分県の進めていたテクノポリス構想によって大企業が進出していたことと、空港が近い立地要件から安岐町に大分パーカライジング株式会社を開設しました。大分パーカライジングは、パーカライジング法で加工する工場なので、取引先から預かった商品をリン酸塩皮膜処理などで付加価値を持たせることで事業が展開していきます。運搬コストの関係などから、工場近郊の会社との取引となりますが、開設当時は取引先が全くなかったことから、名前を知ってもらうために営業活動に力を入れました。そして、ものづくりに関しては世界トップレベルの大分キヤノン株式会社との取引が始まり、自社の現場に入って指導してもらったことで、自社グループ内でも有数の「高品質の塗装集団」へと進化することができました。その後、地元企業との取引も順調に拡大していき、表面処理剤最大手の日本パーカライジングを中核とするグループ87社を要するパーカグループの表面処理受託加工の主力工場となりました。

大分パーカライジングは、昨年4月に第20期目を迎え、9月に20周年記念式典を開催しました。現在は、新規分野の企業との取引が始まり、受注量の増加が見込まれるため、生産体制の拡張を計画しています。また、これまでも地元雇用を積極的に行ってきましたが、今後は高校生の新採用も行っていきたいと考えています。


▲平面レシプロ塗装ライン


▲ロボット塗装ライン

▲検査ライン

第一次産業編

▲右から宮園 稔さん、皓さん

宮園 稔さん、皓（ひかる）さん

国東町浜崎
平成24年からご夫婦でイチゴ栽培をはじめる

宮園 稔さんは、滋賀県の製薬会社に38年間勤めていましたが、母親の介護のため早期退職して平成21年に帰郷しました。製薬会社時代に農薬の研究をしていたことから、平成24年に大分県農業協同組合の東部事業部の常務理事を務めることになりました。仕事で様々な農作物に触れる中で、一株から採れる数量や反別収益、重労働が少なく長く続けられることから、イチゴ栽培をすることを決めました。そして、中古ハウス再利用支援事業を活用して、9・3アールのビニールハウスを1棟建てました。しかし、稔さんは常務理事の仕事があったので、奥さんの皓さんが一人でイチゴ栽培を始めました。皓さんは、農業をしたことがなく、ビニールハウスの完成が遅れて、定植が遅れていたので目標の4トンの半分ほどしか採れませんでした。しかし、フラワーアレンジメントで培った手先の器用さを活かして、袋詰め作業などの細かい作業のコツをすぐに掴んでいきました。そして、平成26年7月に役員の任期を終えた稔さんが、本格的にイチゴ栽培に加わったことによって、目標の数量を収穫できるようになりました。さらに、低コスト省力化対策事業を利用して、昨年12月に新しく5アールのビニールハウスが完成しました。今年度は、通常の定植時期の9月に間に合いませんでしたが、試験的に植えたイチゴの発育が順調なので、来年度からは15アールで約6トンの収穫が見込まれます。

現在の稔さんは、農協のくにさき苺部会の会長として、帰郷後に建設した研究用ビニールハウスで、栽培方法の改善に取り組んでいます。現在県内で栽培しているイチゴが「さがほのか」や「べにほっぺ」など他県が作り出した品種となっています。今後の目標は、大分県独自の品種を作り上げることです。そして、売り物にならない小さいイチゴを収入に変えるために、加工品の研究も考えています。

▲昨年 12 月に完成したビニールハウス

商工会編

▲左から和田 木乃実さん、圭介さん

涛音寮

国見町伊美
平成9年4月に開館

田家で義祖父の壮一郎さんから屏風や掛け軸の作り方を習い、表装の仕事をするようになりました。その後、国見町伊美にある生家の重光家「元造り酒屋・橋本屋の三階屋」が、空き家状態になっていましたが国東の芸術文化の交流の場にしたいとの想いを、現在の所有者で遠い親戚にあたる福岡市にある純真学園の前理事長 福田敏南さんに伝えました。その想いは福田敏南さんに理解され、約2年間かけ改修工事を行ってくれました。そして、平成9年4月に「涛音寮」として開館し、木乃実さんが管理することになりました。涛音寮の中には、自分で作った屏風などの作品を中心に展示するようにし、タコ飯やお茶も提供することにしました。古民家とギャラリーが融合した新しい形態は珍しく、開店当時から多くのお客様で賑わいました。その後、木乃実さんは、県外の表具士に修復作業などを習いに行って技術を磨き、着物を使った屏風や変形屏風などを発案し、作品の幅を広げて行きました。今では、100以上の作品を生み出し、県外でも個展を開くようになっています。

5年前、息子の圭介さんは、熊本県の大学に進学しそのまま就職していましたが、自分で何かを制作した方が楽しいのではないかと思い、後を継いで表具士になるために戻ってきました。小さい頃からお母さんの作業を見ていたので、違和感なく表装の世界に入ることはできましたが、技術の奥深さを痛感し、岡山県の表具士に修復技術などを習いに行きました。今では、古い掛け軸や屏風などの修復作業を一人で行えるようになりました。また、自分でデザインした屏風を涛音寮内にいくつか展示をし、お客様の反応を参考に、自分の作風を模索し始めています。

開館から20年を迎えるにあたって圭介さんは、「自分の作品も増やして数を揃え、様々な事業を展開していきたい。また、現在訪れていただいているお客さんは市外の人が多いので、市内の方にもたくさん訪れてもらえるようなイベントなどを企画していきたい」と語っていました。